

郷土研通信



ハクサンイドリ
ラン科（北海道指定植物）

野生ランの女王。摩周岳、美幌峠では草原に見られる。『阿寒・摩周の植物』（細川晋治著）から

発行：てしかが郷土研究会（Teshikaga Regional Studies Association）

〒088-3211 北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10（松橋方） 文章責任：松橋 秀和

URL: <https://www.teshi-ka-ga.org/>

近況報告

○ふるさと歴史館の補助業務について、4月に開かれた総会において基本的に受けることで、承認をいただきましたが、現段階で教育委員会から正式な打診はありません。

当会としてはこれまでどおり肅々と会の目的遂行の活動を続けてまいります。また、今年2月に「弟子屈町図書館所蔵の郷土史料の所管替えに関する要望書」についても正式な回答はきていません。

○新しい財産

絵画2点（上野山清貢作・田辺三重松作） 自筆原稿4点（詩人・更科源藏3点、詩人・風山瑕生1点）。いずれも我々の活動を支援してくださる辻谷守氏から寄贈された物です。



情報提供



○特別展示会

「時速3kmの旅」

移動の基本は「歩く」ことから。「北海道東トレイル」は「阿寒摩周国立公園制定90周年」を記念して設定され、知床国立公園・阿寒摩周国立公園・釧路湿原国立公園を縦断する道です。自動車などの乗り物で移動することが多くなった現代、「歩く」ことで新しい発見、忘れていたものに出会えることがあるかも知れない。そんな展示会が開催されます。

とき 令和8年6月20日

～7月20日まで

ところ

川湯ビジターセンター

観覧料 無料

○講演会

「オオウバユリの生活史」

特殊な生活史をもつオオウバユリの生態を解説する講演会が左記のとおり開催されます。旧弟子屈営林署の敷地にも自生していて、薄緑色の可憐な花を見ることでできましたが、中心市街地構想の建設工事のため姿を消しました。また、球根が食糧の澱粉となることから、開拓当時の移住者が根こそぎ採りつくした、という文献を読んだことがあります。

令和8年6月20日（土）

13:30～15:30

ところ

川湯ビジターセンター

その他 無料

（定員50名・申込不要）



勉強会

演題

「更科源藏さんが

残してくれたもの」

講師 齋藤敬子氏

詩人・更科源藏はアイヌ文化にも造詣が深い。異なる文化を持つ者からアイヌ文化を見るとその民族の精神世界の本質が見えてくるがあります。

「水が凍って氷になるか、氷が融けて水になるか」。北海道に永く暮らした人間にとって、生活感としてどちらが実感としてとらえられるでしょうか。

次回の例会

令和八年六月二十四日（水）

一九：〇〇

ふるさと歴史館

勉強会

仮題「昭和13年の屈斜路湖底噴火大地震に関する考察

北海道立総合研究機構

産業技術環境研究本部

エネルギー・環境・地質研究所

主査 山口高志氏

むかしむかし写真館

No. 366

更科源蔵著「原野シリーズ」に弟子屈を読む

『父母の原野』の段―その4

松橋 秀和

前回の「その3」で、『父母の原野』には丸米旅館の記述がないことをお話した。それは、次の文脈からである。

一軒目は「釧路川ぶちでわく温泉で湯治をする、草小屋の温泉宿」。これは本山旅館であろう。一軒目は

「できてまもない木造の、官設の宿泊所の駅通」。これは『弟子屈町史』で、毛皮商をしていた横田助作が「明治十九年に現在の駅付近にアイヌ部落があったので、ここを住まいとしており、駅通所もそこで経営したのであるが…」の駅通所が市街地に移動したのである。三軒目は「釧路の漁場の経営者が、

父たちがここにはいったときは、カリカンとニタトロマップ駅の建物 のほかには、密林の中の細道を八キロいったさきに、テシカガという温泉のわいているところが、そこに三軒の和人の家があった。

その一軒が、釧路川ぶちでわく温泉で湯治をする、草小屋の温泉宿だった。 それにもう一軒、できてまもない木造の、官設の宿泊所の駅通。もう一軒は釧路の漁場の経営者が、アイヌの人のもつてくる毛皮を買い入れるところであった。

この文を読み解くと、「ここに三軒の和人の家があった」という文がある。



『弟子屈町商工のあゆみ』から

松浦武四郎が見た温泉か？

アイヌの人のもつてくる毛皮を買い入れるところ」とあるが、これは駅通を兼ねていた横田助作で、柳沼万之助は明治十九年にテシカガに定住し商いを始め、雑貨や呉服を商つ

ていた、と『弟子屈町商工のあゆみ』にある。

因みに、熊牛原野から「密林の中の細道を八キロいったさきに、テシカガという温泉のわいているところがあり…」とは、松浦武四郎の『久摺日誌』で、テシカガ・コタンに泊まった翌日の文に出てくる「十日曇天靄深きにコロコを案内に召連西岸に渡り式三丁上るや、川岸に温泉有…(略)」のところ、本山旅館の本山七右衛門は、この温泉を利用して温泉旅館を経営するところにしたのであろう。

アイヌ語地名のようでそうではない漢字で「三平古丹」という変わった地名がある。

これは、そこに「サンペ」という名のアイヌの老人が一人で住んでいたことから、四郎の父たちは敬愛を込めて「サンペ・チャチャ(男の老人)」と言っていた。

時代が下って農業移民が釧路川の対岸にも和人が入植するようになり、そこに住む人の郵便物は場所がはつきりとしなかったので、セタイベツに住む四郎の父のところに届くことがあった。

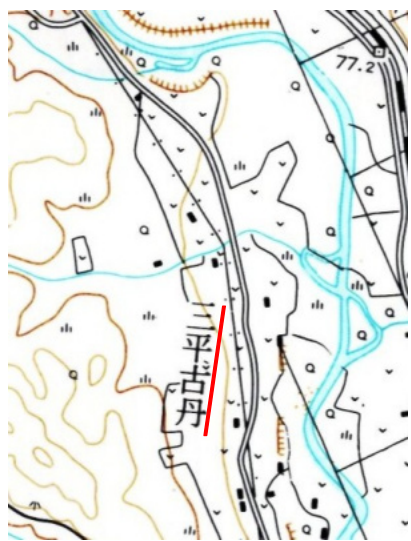
そこで四郎の父や集落の人たちが相談して、サンペチャチャが住んでいるところだから、「サンペ・コタン」はどうだろうかとなり、そのサンペが三平に訛って三平古丹と漢字の地名になった、とのことである

（更科忠著「三平古丹と名付けた人々」へ農協だよりを参照する。）

（つづく）

サンペコタン

話題は変わるが、主人公四郎の父たちが入植した熊牛原野の釧路川の対岸に、



地名になった、とのことである

（つづく）